

物理主義を導く思考可能性論証：ミラー論証とゾンビ論証の対立

Conceivability Argument for Physicalism: Conflict between  
Zombie Argument and Mirror Arguments

矢歌礼次郎

**Abstract**

The conceivability argument has been used for anti-physicalist arguments, notably the *zombie argument*. Conversely, physicalists have advanced the *mirror arguments*, which presuppose the conceivability of physicalism or an anti-zombie world – a world with only physical truths yet retaining phenomenal consciousness. In this paper, I will explore the conditions necessary for proponents of the zombie argument to successfully demonstrate its superiority over the mirror arguments. Specifically, I will show that they need to establish that (i) physicalism and an anti-zombie world are inconceivable, (ii) a zombie world is conceivable, and (iii) these arguments do not straightforwardly entail the falsity of physicalism.

**(1) 研究テーマ**

ゾンビ論証 (zombie argument) は、現実世界と同じマイクロ物理的真理が成立していながらある現象的真理が成立していないような世界——ゾンビ世界の思考可能性から物理主義が偽であることを導く反物理主義的な思考可能性論証である (Chalmers 1996, 2010)。ゾンビ論証の要は「ある種の思考可能性は可能性を含意する」という CP テーゼの前提にある。これまでゾンビ論争は様々な批判に晒されてきたが、それらの反論のうち、CP テーゼを用いて物理主義が真であることを導く思考可能性論証——ミラー論証 (mirror argument) を構成するという物理主義的な戦略がある。

ゾンビ論証の支持者はいかにしてミラー論証に応答すべきなのかが本稿の研究テーマである。そこで、より具体的に、本稿が問題にするのは次の問いである。ゾンビ論証がミラー論証を優越するというを示すには、いかなる議論が要求されるのだろうか。

**(2) 研究の背景・先行研究**

ゾンビ論証とミラー論証の論争は、意識に関する物理主義の真偽をめぐる論争である。物理主義は「我々の世界の最小限の物理的複製であるようない

かなる世界も、我々の世界の完全な複製である」(Jackson 1998, p. 12) と主張する立場のことである。したがって、意識に関する物理主義によれば、物理的事実は現象的意識の存在を必然化する。それに対して、二元論という考え方によれば、物理的事実は現象的意識の存在を必然化しない。“P” がマイクロ物理的真理の総体、“Q” が任意の現象的真理を表すとすると、それぞれの考え方は次のように形式的に定義できる。

物理主義 (physicalism) :  $\Box(P \supset Q)$

二元論 (dualism) :  $\neg\Box(P \supset Q)$

ここで Chalmers (1996, pp. 94-99; 2010, p. 142) によって提起されたゾンビ論証を導入しよう。“◆” を思考可能性オペレータとすると、論証は次のように形式化できる。

- (1)  $\Diamond(P \wedge \neg Q)$
- (2)  $\Diamond(P \wedge \neg Q) \supset \Diamond(P \wedge Q)$
- (3)  $\Diamond(P \wedge \neg Q) \supset \neg\Box(P \supset Q)$
- (4)  $\neg\Box(P \supset Q)$

“ $P \wedge \neg Q$ ” は、すべてのマイクロ物理的真理の連言が成立していながらある現象的真理が成立していない、ということを表している。すなわち、前提 (1) では、ゾンビ世界の思考可能性が打ち出されている。次に、前提 (2) は、ゾンビ世界の思考可能性がその可能性を含意するといわれている。これは、次のような CP テーゼ (Chalmers 2002, p. 171; 2010, p. 147) の実例である。

**CP** : 任意の命題  $S$  について、 $\Diamond S \supset \Diamond S$

このとき、 $S$  の思考可能性には制限が設けられる。Chalmers によれば、 $S$  の思考可能性は理想的 (ideal) でなければならない。 $S$  が理想的に思考可能なのは、 $S$  が認知的制約から自由で合理的な熟慮のもとでアプリアリに排除されないときであると定義される。本稿では、特に明記しない限り、“思考可能性” は理想的な思考可能性を表すものとする。<sup>\*1</sup>

さて、ミラー論証の特徴を概説しよう。ミラー論証には大きく分けて二種類のものがある (VandenHomergh 2020)。第一に、様相的なミラー論証 (Marton 1998; Sturgeon 2000) があり、次のように表すことができる。

- (5)  $\blacklozenge \Box(P \supset Q)$
- (6)  $\blacklozenge \Box(P \supset Q) \supset \lozenge \Box(P \supset Q)$
- (7)  $\lozenge \Box(P \supset Q) \supset \Box(P \supset Q)$
- (8)  $\Box(P \supset Q)$

この論証の要点は、様相的主張の思考可能性を前提している点、それから S5 を用いた論証である点にある。S5 は様相論理の公理系であり、そこでは任意の命題 A について、 $\lozenge \Box A \supset \Box A$  が定理となる。したがって、前提 (7) は S5 で恒真である。そのため、前提 (7) を退けるには、S5 の枠組み自体を拒否しなければならないが、これは有望ではない (Marton 1998, p. 132; Chalmers 2010, p. 179)。S5 を拒否すると、ゾンビ世界は現実世界から到達不可能な世界であり、現実世界から到達可能なすべての世界では  $P \supset Q$  が真であるモデルが構成可能となる (Marton 1998, p. 132)。このモデルでは、確かにゾンビ世界は存在するが、あくまで現実世界においては物理主義が真であることになる。しかしこれは二元論にとって不都合であるため、S5 の拒否は二元論にとって魅力的な戦略ではない。また、前提 (2) が CP テーゼの実例であったように、前提 (6) も CP テーゼの実例であるため、CP テーゼを支持する限り、二元論者は前提 (6) を退けられない。以上より二元論者は前提 (5) を否定するほかない。

第二に、ミラー論証には、非様相的主張の思考可能性を前提に組み込む、分析的なミラー論証がある (Frankish 2007; Brown 2010, 2013; Campbell et al. 2017)。各論者による特定の議論を捨象すると、その論証形式は次のようなものになる。なお、以下に説明するように、添字の “t” は総体性条項を表している。

- (9)  $\blacklozenge (P_t \wedge Q)$
- (10)  $\blacklozenge (P_t \wedge Q) \supset \lozenge (P_t \wedge Q)$
- (11)  $\lozenge (P_t \wedge Q) \supset \Box(P \supset Q)$
- (12)  $\Box(P \supset Q)$

こうした論証は、Frankish (2007, p. 653) によって、アンチゾンビ論証 (anti-zombie argument) と呼ばれている。 $P_t \wedge Q$  を満たす世界はアンチゾンビ世界といわれ、これは我々の現実世界の物理的複製であり、かつそこで現象的意識が存在するような世界を表す。このとき、P に総体性条項 (totality

clause) ---- “t” は “that's all” を意味している ---- を添えることで、アンチゾンビ世界は物理的真理のみが成り立つ世界であること、すなわち、その世界で成り立ついかなる種類の真理も物理的真理であるような世界であることが表される。この条件を設ける理由としては、単に  $P \wedge Q$  を真とする世界を想定する場合、 $Q$  が非物理的真理であるケースが排除できないからである。他方、 $P_t \wedge Q$  を真とする世界を想定することで、この世界では  $Q$  が物理的真理であるということが保証される。また、 $P_t$  が真である世界では、総体性条項の働きによって、他のすべての真理が  $P$  (マイクロ物理的真理の総体) にスーパーヴィーンするような世界であると想定される。したがって、分析的なミラー論証の前提 (9) は、物理的真理のみが成り立っており、かつ、それにスーパーヴィーンする形で現象的真理もまた成り立っているような世界の思考可能性<sup>\*2</sup> を表している (Frankish 2007, p. 653; Campbell et al. 2017, p. 226)。

さて、前提 (10) も CP テーゼの実例であるため、CP テーゼを支持する限り、二元論者は前提 (10) を退けられない。次に、前提 (11) も退けるのが困難である。上述のように  $P_t \wedge Q$  で意図されているのは、物理的真理のみが成り立つ世界で現象的真理もまた成り立っているということである。ところで、この世界は現実世界の完全な物理的な複製世界であった。したがって、ある世界で  $P_t \wedge Q$  が真であり、物理的真理の総体が任意の現象的真理にとっての十分条件ならば、完全に同一な物理的真理が成立している現実世界においても同様に十分条件であるはずである。したがって、現象的意識は物理的なものではないと主張する二元論は偽であり、前提 (11) は真であるといえる。

このとき、前提 (11) には一見したところ論理的飛躍があると思われるかもしれない。なぜなら、ある世界で現象的真理が物理的真理だからといって、物理的真理ではないような現象的真理が成立する世界が存在しないとは限らない、と思われるからである。しかし、前提 (11) に論理的飛躍は存在しない。上述のように、 $P_t \wedge Q$  を真とする世界では、すべての真理が  $P$  にスーパーヴィーンし、それゆえ  $Q$  も  $P$  にスーパーヴィーンする。だとすれば、 $P_t$  が真であるいかなる二つの世界も、すべての観点において同じ真理を有していなければならない。そのため、 $P_t$  を真とするある世界が  $Q$  も真とするならば、 $P_t$  を真とするいかなる世界も  $Q$  を真とする。したがって、ある世界で  $P_t \wedge Q$  が真ならば、すべての世界で  $P \supset Q$  が真であるといえる。<sup>\*3</sup>

以上二つのミラー論証を踏まえると、その特徴は次のようにいえる。ミラー論証は、特定の世界 ( $\Box(P \supset Q)$  が真である世界や  $P_t \wedge Q$  が真である世界) の思考可能性と CP テーゼを用いて物理主義的な結論を導くという点で、ゾンビ論証と対称的な (symmetrical) 論証である。ミラー論証はゾンビ論証と上記

の点で同じ方法を用いて正反対の帰結を導くため、ミラー論証を構成できるならばゾンビ論証の有効性は損なわれる。

このとき、次のことは注意に値する。すなわち、ミラー論証を提示する各論者は必ずしもミラー論証自体の有効性にコミットしているとは限らず、各論者によって主張の力点は異なる。例えば、Frankish (2007, p. 666) や Campbell et al. (2017, p. 239) は、ミラー論証が構成できることからゾンビ論証が依拠する CP テーゼの信憑性は損なわれると主張する。また、Brown (2010, p. 52) や VandenHomborgh (2017, p. 121) は CP テーゼ自体には反論せず、ゾンビ論証は、アンチゾンビや物理主義が思考不可能だと暗に前提している点で、論点先取に陥っていると指摘する。さらに Marton (1998, p. 134) によれば、一般に物理主義が真であることは思考可能であるため、ミラー論証に応答するために物理主義が思考不可能だと主張するなら、今や二元論者の側に説明責任がある。

### (3) 筆者の主張

本節ではゾンビ論証の支持者がミラー論証に反論するにあたって要求される議論の条件を明らかにする。特に、ゾンビ論証がミラー論証に優越すると主張するためには、いかなる議論を提示する必要があるのかを示す。

さて、ゾンビ論証がミラー論証に優越するというを示すには次の三つの条件を満たす議論を提示する必要がある。すなわち、その議論は、(i) アンチゾンビ世界と物理主義の思考可能性を拒否し、(ii) ゾンビ世界の思考可能性を支持し、(iii) 二元論（物理主義の否定）を導かない、という三つの条件を満たす必要がある。

まず、(i) が設けられる理由は次の通りである。ミラー論証とゾンビ論証の主な相違は「何が思考可能であるか」という点にあり、いずれの論証も CP テーゼを前提にしている。したがって、アンチゾンビ世界ないし物理主義の思考可能性を認めると、CP テーゼ（と他のもっともらしい前提）によって物理主義が真であると導かれてしまう。しかし、これは二元論にとっては不都合である。これを避けるためには、二元論者はアンチゾンビ世界や物理主義は実は思考可能ではないと説明する必要がある。したがって、二元論者は (i) を満たす議論を提示する必要がある。

次に、二元論者は (ii) を満たす議論を提示する必要がある。なぜなら (ii) を満たさない限りは、ゾンビ世界もアンチゾンビ世界も物理主義もすべて思考不可能であるケースが排除できないからである。このようなケースでは、ミラー論証だけでなくゾンビ論証も妥当ではなくなってしまう。したがって、

ゾンビ論証がミラー論証を優越すると言いうるためには、ゾンビ世界がそれ自体で思考可能であることの積極的な理由を提示しなければならない。したがって、(i) のほかに (ii) も満たす必要がある。

最後に、(iii) が設けられる理由は次の通りである。仮に (i) と (ii) を満たす議論が二元論を導くとすれば、そもそも二元論にとってゾンビ論証は冗長 (redundant) であるという問題 (Marton 1998; Frankish 2007; Campbell et al. 2017; Heikinheimo & Vajja 2013) が浮上する。例えば、物理主義の考え方には矛盾があると示す議論があったとしよう。このとき、その議論は、(i) を満たすだろうが、同時に、物理主義の概念的な不整合性から物理主義の不可能性を導くかもしれない。そのような議論は、CP テーゼに依拠していないため、ミラー論証に晒される危険性もない。その点において、この議論はゾンビ論証よりも強力な議論であり、それゆえこのような議論が成立すれば、CP テーゼに依拠しつつミラー論証に脅かされうるゾンビ論証が余計なものとなされる。もちろんゾンビ論証を放棄するならば、その独立の論証による二元論の導出は許容できるだろうが、ゾンビ論証を擁護するという当初の目的を鑑みれば、これはゾンビ論証の支持者にとっては不都合な帰結である。したがって、ゾンビ論証がミラー論証を優越すると主張するためには、(i) と (ii) に加え、(iii) も満たす必要がある。

#### (4) 今後の展望

本節では、前節で提示した諸条件を踏まえた二元論的な主張を挙げ、またそれに対する簡単な批判を与えることで、今後の展望を示したい。

まず、(i) を満たす議論として、ゾンビ論証とミラー論証が用いている思考可能性の種類の違いを指摘することができるかもしれない。例えば Chalmers (2010, p. 180) は、アンチゾンビ世界や物理主義はせいぜい一見したところ消極的に思考可能であるにすぎず、理想的で積極的に思考可能ではないと示唆する。しかし、この主張に対して、これはあくまで Chalmers の直観に依拠した論点先取でしかない、と指摘することができる。各世界の思考可能性が専ら論者の直観に依拠しているならば、Chalmers がゾンビを理想的に思考可能だと考えるのと同程度に、物理主義者にとってアンチゾンビ世界や物理主義は理想的に思考可能だといえるかもしれない (Heikinheimo & Vajja 2013, p. 12; Piccinini 2017, p. 90)。

次に、(ii) を満たす議論として、ゾンビ世界の思考可能性を支持する積極的な理由を提示できるかもしれない。例えば、Sepetyi (2019, p. 26) は、元々 Chalmers (cf. 1996, p. xii) によって提起された、意識のハード・プロブレ

ム (the hard problem of consciousness) の存在に訴えることで、ゾンビ世界の思考可能性を支持している。意識のハード・プロブレムとは、なぜ単なる脳の物理的過程から現象的意識が生じるのか、という問題である。これは、物理的真理が現象的真理を必然化するように思えないからこそ問題として成立している。だとすれば、意識のハード・プロブレムは、まさにゾンビ世界が思考可能だからこそ提起されたのだといえる。したがって、Sepetyi によれば、同問題が有意味な問題として存在するならば、ゾンビ世界は思考可能である。ところで意識のハード・プロブレムの存在自体は二元論を導かないため、この議論は (iii) も満たしているといえよう。

これに対しては、次のようなタイプ A 物理主義的な批判が想定される。第一に、確かに意識のハード・プロブレムはゾンビの思考可能性を支持するかもしれないが、だからといってそこで支持される思考可能性が理想的な思考可能性だということは明らかではない。第二に、そもそも意識のハード・プロブレム自体が疑似問題であるとしたら、意識のハード・プロブレムの存在を論拠として用いるのは不適切である。

最後に、(ii) を満たす他の議論として、ゾンビ論証以外の反物理主義的な思考可能性を援用することができると思われるかもしれない。例えば、 $\neg \Box(P \supset Q)$  が思考可能であるということを示せれば、 $P \wedge \neg Q$  の思考可能性を支持することができる。しかし CP テーゼと S5 を前提とする限り  $\Box \neg \Box(P \supset Q)$  は  $\neg \Box(P \supset Q)$  を導くため (iii) に反する。したがってゾンビ世界の思考可能性を擁護するために  $P \wedge \neg Q$  以外の命題の思考可能性に訴えるのも有望ではない。

このように (i) から (iii) を満たす議論の提示は、現時点で二元論にとって陰しい方途であると思われる。しかし逆に言えば、これらの条件を満たす議論があれば、それは二元論を支持する強力な論拠となるだろう。本稿で挙げた諸条件は、そのような強力な論拠を得るためのよい指標となるかもしれない。

## 注釈

\*1 思考可能性には他にもいくつかの区別がある (Chalmers 2002, 2010)。例えば思考可能性にはさらに積極的 (positive) / 消極的 (negative) な思考可能性の区別がある。前者は、S が成立する状況を整合的にイメージできるという意味で S は思考可能だとされ、後者は、S がアプリアリな推論によって排除されないという意味で S が思考可能だとされる。さらに、一次的 (primary) / 二次的 (secondary) な思考可能性の区別もある。前者は、現実とみなされたある世界で S が真であることの思考可能性であり、後者は反事実的とみなされたある世界で S が真であることの思考可能性である。

\*2 Frankish (2007) は理想的で一次的な思考可能性、Brown (2013) と Campbell et al. (2017) は理想的で消極的な思考可能性を想定している点で、ここで各論者によって想定される思考可能性の種類は微妙に異なるが、理想的な思考可能性が可能性を含意するということは各論者ともに前提している。

\*3 分析的なミラー論証は本節で紹介した論証に尽きない。例えば Brown (2010) は、私と同一の非物理的性質を有しながら現象的意識を欠く存在の思考可能性から二元論が偽であることを導く、ズンビ論証 (zombie argument) を展開している。

## (5) 参考文献

Brown, R. (2010) "Deprioritizing the a priori arguments against physicalism" in *Journal Consciousness Studies* 17, 3-4: 47-69.

Brown, R. (2013) "The Two-Dimensional Argument Against Dualism" in PhilArchive. URL: <https://philarchive.org/archive/BROTTA-6>

Campbell, D. Copeland, J., & Deng, Z. R., (2017) "The inconceivable popularity of conceivability arguments" in *The Philosophical Quarterly* 67, 267: 223-240.

Chalmers, D. (1996) *The Conscious Mind: In Search of a Fundamental Theory*, Oxford.

Chalmers, D. (2002) "Does conceivability entail possibility?" in Gendler, T. S, & Hawthorne, J. (eds.) *Conceivability and Possibility*, Oxford: 145-200.

Chalmers, D. (2010) *The Character of Consciousness*, Oxford.

Frankish, K. (2007) "The Anti-Zombie Argument" in *The Philosophical Quarterly* 57, 229: 650-666

Heikinheimo, A. & Vajja, T. (2013) "Redundancy of the Zombie Argument in *The Conscious Mind*" in *Journal of Consciousness Studies* 20, (5-)6: 6-26.

Jackson, F. (1998) *From Metaphysics to Ethics: A Defense of Conceptual Analysis*, Oxford.

Marton, P. (1998) "Zombies versus materialists: The battle for conceivability" in *Southwest Philosophy Review* 14. 1 (1998): 131-138.

Piccinini, G. (2017) "Access denied to Zombies" in *Topoi* 36. (1): 81-93.

Sepetyi, D. (2019) "Why phenomenal zombies are conceivable whereas anti-zombies are not" in *Actual Problems of Mind* 20: 18-27.

Sturgeon, S. (2000) *Matters of Mind: Consciousness, reason and nature*,



Routledge.

VandenHombergh, J. (2017) "Inconceivable physicalism" in *Analysis* 77. (1), 116-125.

VandenHombergh, J. (2020) "Consciousness, conceivability, and intrinsic reduction" in *Erkenntnis* 85: 1129-1151.

(東京大学)